

トルコギキョウの収穫時期が花卉面積および覆輪花卉の着色割合に及ぼす影響

渡辺 功・金子英一
(熊本県農業研究センター)

Isao Watanabe and Eiichi Kaneko:
Effect of Harvesting Period on Area of Petal and Rate of
Colored Petal Area in Picotee Varieties of *Eustoma grandiflorum*

トルコギキョウの開花時期による花卉の面積および着色割合の変動を調査し、変動要因を検討した。

1. 材料および方法

‘キャンディマリン’, ‘ネイルピーチネオ’, ‘ネイルマリンネオ’ を供試し、406穴の購入苗を用いた。基肥として $N:P_2O_5:K_2O = 1.5kg:1.5kg:1.5kg/a$ を加えた縦26cm×横56cm×深さ18cmのコンテナに、2000年8月2日、10月18日、12月4日、2001年3月29日、5月23日、8月2日、8月30日に各品種36株を定植した。栽培は、天窓の換気設定25℃のガラス温室で行い、冬季は最低12℃に加温した。2000年10月、2001年2月、5月、6月、7月、10月、11月にそれぞれ採花適期となった。採花後生育調査を行い、切り花長と切り花重が平均的な10株から開花花卉をすべて採取し、花卉と着色部分の面積を葉面積計(林電工AAM-9)で測定した。

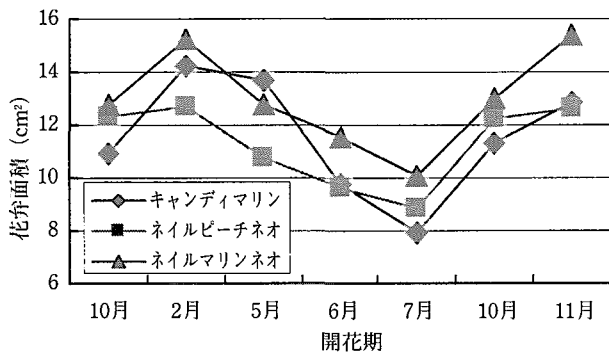
2. 結果および考察

1) 花卉面積は3品種とも低温期に大きくなる傾向であった(第1図)。

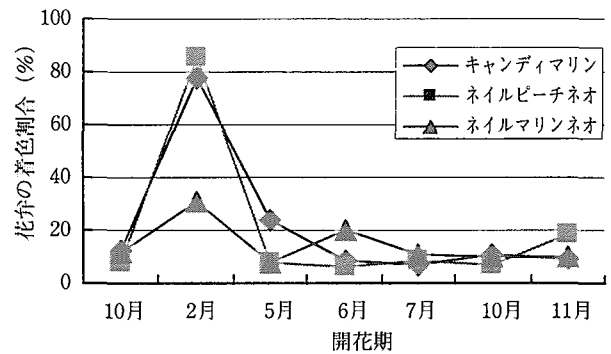
‘キャンディマリン’では、花卉面積と採花前60日間の20℃未満の積算遭遇時間との間で有意な正の相関が認められた。花卉面積と切り花長および切り花重、全花蕾数との間には相関関係は認められなかった(第1表)。

2) 花卉の着色割合は3品種とも2月に最大になったが着色割合には品種間差が認められた。5月~11月の着色割合は7~24%で推移した(第2図)。花卉の着色割合と採花前60日間の日最高気温の積算値との間には、3品種とも有意な負の相関関係が認められた。また、‘キャンディマリン’と‘ネイルピーチネオ’では、花卉の着色割合と採花前60日間の20℃未満の積算遭遇時間との間に有意な正の相関が、平均気温の積算値と花卉の着色割合との間に有意な負の相関が認められた。一方、花卉の着色割合と切り花長および切り花重、全花蕾数および最低気温の積算値との間には、3品種とも相関関係は認められなかった(第2表)。

以上のことから、花卉の面積と着色割合の変動には、気温の関与が推察された。



第1図 開花期による花卉面積の差



第2図 開花期による花卉の着色割合の差

第1表 花卉面積と切り花品質および採花前60日間の積算気温、積算遭遇時間との相関係数

品種	切り花長	切り花重	全花蕾数	最低気温	最高気温	平均気温	20℃未満	25℃未満	30℃未満
キャンディマリン	0.443	0.322	-0.433	-0.815*	-0.758*	-0.790*	0.832*	0.791*	0.746*
ネイルピーチネオ	-0.123	-0.036	-0.693	-0.300	-0.283	-0.308	0.425	0.277	0.184
ネイルマリンネオ	0.054	0.089	0.039	-0.671	-0.604	-0.640	0.745*	0.641	0.552

注) *は5%の危険率で有意差があることを示す。最低、最高、平均気温は日最低、日最高、日平均気温の積算値。20℃未満、25℃未満、30℃未満は1日の遭遇時間の積算値。

第2表 花卉の着色割合と切り花品質および採花前60日間の積算気温、積算遭遇時間との相関係数

品種	切り花長	切り花重	全花蕾数	最低気温	最高気温	平均気温	20℃未満	25℃未満	30℃未満
キャンディマリン	0.137	0.104	-0.392	-0.702	-0.843*	-0.787*	0.832*	0.714	0.626
ネイルピーチネオ	0.125	0.218	-0.317	-0.655	-0.829*	-0.769*	0.825*	0.687	0.554
ネイルマリンネオ	0.198	0.130	0.094	-0.576	-0.747*	-0.681	0.678	0.616	0.525

注) は第1表と同じ。